

サロン

「さあ、奏いてちょうだい」

紅茶の香りがけだるい腕に
鍵盤は私を押しつけるべく
ああ、何を奏こう

「どうしたのよ、さあ、奏くのよ」

テーブルに寄り集う紳士・淑女よ
故郷は遥かに抑圧につぶれ
ああ、私に何が奏けるだろう

「ろくでなし、奏くのよ」

笑いが鼓膜を突き破り、私は疲れ
咳は胸を破り、息切れがする
ああ、帰りたい、帰りたい・・・

「さあ、ポロネーズを」

無理やり両手をつかみ上げられ
鍵盤の上にたたきつけられ
嘲笑の中に私は蒼ざめ・・・

力ない指を嬰八の上に落とせば
全身の抒情が音となって逃げ去り
人々は私の魂を吸血鬼の如く吸う

豪奢と倦怠けだの中に人々は陶醉し
私はその中で己が魂を売り渡す
ああ、何のために私は奏くのか

止めようとしても止まらぬ指が
私を絶望の中へ引きずり
ああ、それでも
ああ、それでも私は奏くだろう

(1985.4.15)